

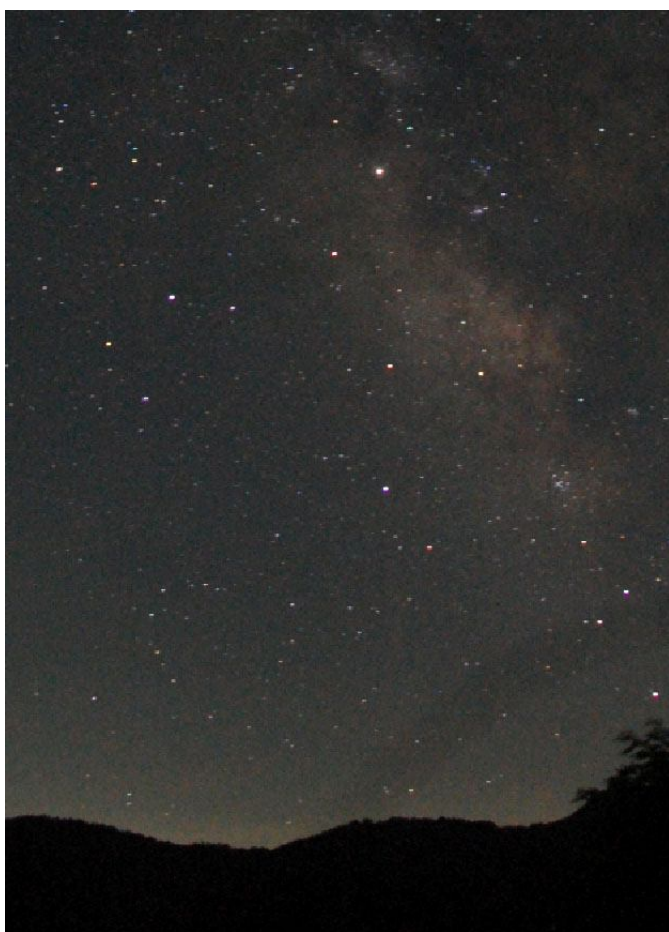
「夏の天体観望(3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

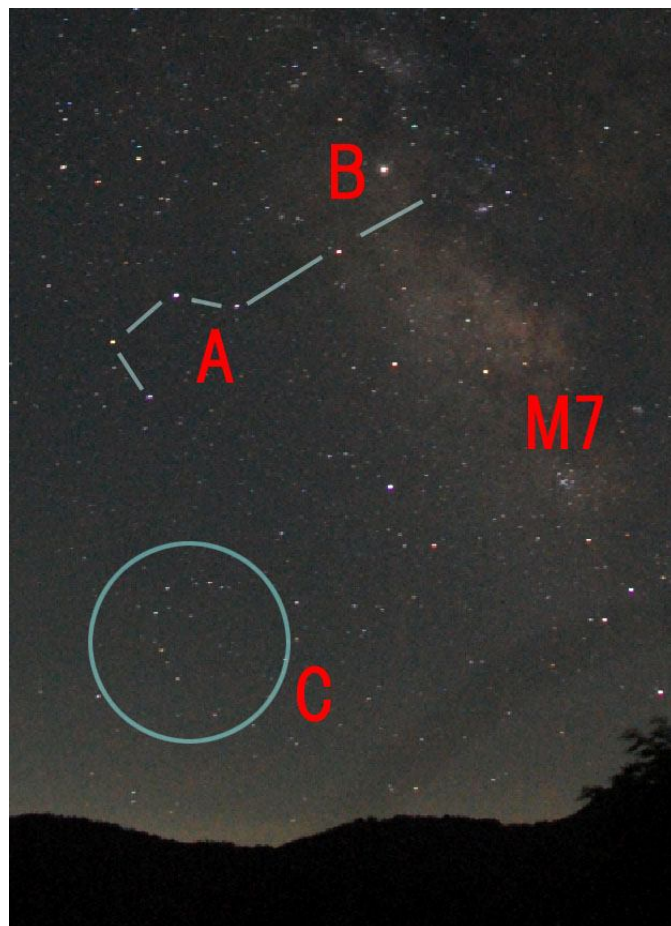
田中 千尋 Chihiro Tanaka

天の川は、全天(天球)をほぼ一周している。しかしその明るさには、方向(天球上の星座位置)によって濃淡がある。天の川の正体は、我々太陽系も所属している「銀河系」そのものの姿である。銀河系は中心付近が最も星の密度が高く、地球(太陽系)から見て、銀河系の中心方向を見たときに、一番明るく見える。

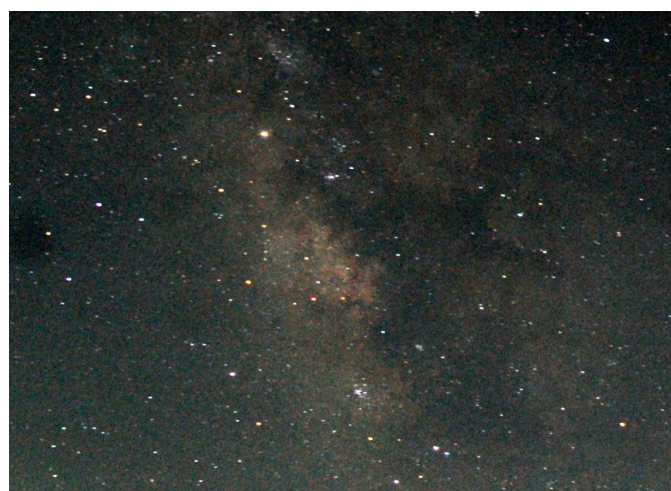


銀河系の中心方向は、いて座の中にある。従っていて座付近の天の川は、全天で最も明るく見えることになる。「いて座銀河」という用語もあるほどだ。関東地方では、いて座は南の地平線に低い、天の川が明るいので、誰でも天の川の存在に気づくだろう。

いて座そのものは形のとりにくい星座だが、その中の星の並び「南斗六星」はすぐに見つかる。いて座には一等星はないのだが、現在その南斗六星の中に、普段は見えない明るい星が見えている。土星だ。土星が天の川の中にある、すばらしい光景だ。



Aがいて座の南斗六星、Bが土星だ。Cは「みなみのかんむり座」という、不遇な星座。天の川の中には「M7(メシエ7番)」という、肉眼でも見える「散開星団」もある。実に豪華な眺めである。8月の林間学校では、是非子どもたちと見たいと思った。



星空に目が慣れてきて、いて座付近の銀河をよく見ると、天の川の中に暗い部分があることに気づく。これは、銀河の無数の星の手前(地球側)に、可視光を発しない「暗黒物質」がある為である。肉眼ではさすがにわからないが、写真には、暗黒物質がつくる「影」の形状までわかる。深宇宙の神秘的な姿だ。